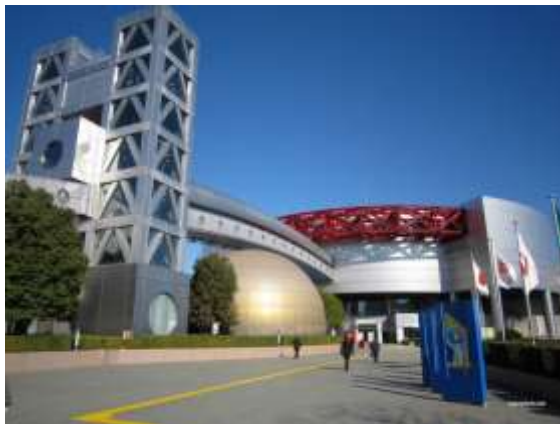


高等学校の指導・評価の現状と 改善の方向性について

中央教育審議会初等中等教育課程部会
外国語WG (第6回)
2016年2月23日



江原美明

神奈川県立国際言語文化アカデミア

Three Questions

1. 「論点整理」及び「WG」の議論を踏まえた改善方策は何か？
2. 高等学校の英語教員の現状と課題を踏まえた留意点は何か？
3. 今後どうすればよいのか？

1. 議論を踏まえた改善方策

平成27年度 英語力調査 (高校3年 約9万人)

改善のための提案:

- ① 具体的な教育目標の設定
- ② 主体的・協働的・対話的な学びの推進
- ③ 基礎的な知識・技能を活用した「発表、
討論・議論、交渉」などの言語活動の実施
- ④ 適切な教科書等の教材の作成・活用
- ⑤ 目標に準拠した適切な評価の実施

英語でできることを考える

特色ある学校の取組 (授業)

Listening: 英語による授業

Reading: 初見の英文/論理(図解)/2人で説明

Speaking: 準備⇒即興/発問/話題/易しいテキスト
ブレインストーミング, ミニディベート, ディスカッション

Writing: 概要や要点/ エッセイ /話す⇒書く

考えながら英語を使う

特色ある学校の取組 (学校環境)

スクールカラー: 「間違いを恐れずに発言しよう」

学校行事: コンテスト、海外修学旅行
プロジェクト学習、姉妹校交流

ニーズ: 卒業生の英語使用場面の調査

協働: CAN-DOと共通ハンドアウト
ALTとの協働

英語を使う環境を作る

2. 現状と課題を踏まえた留意点

平成26年度「現職高校英語教員研修の波及効果」に関する研究（県立高校教員25名/国際言語文化アカデミア）

研修
内容

教員の
実践

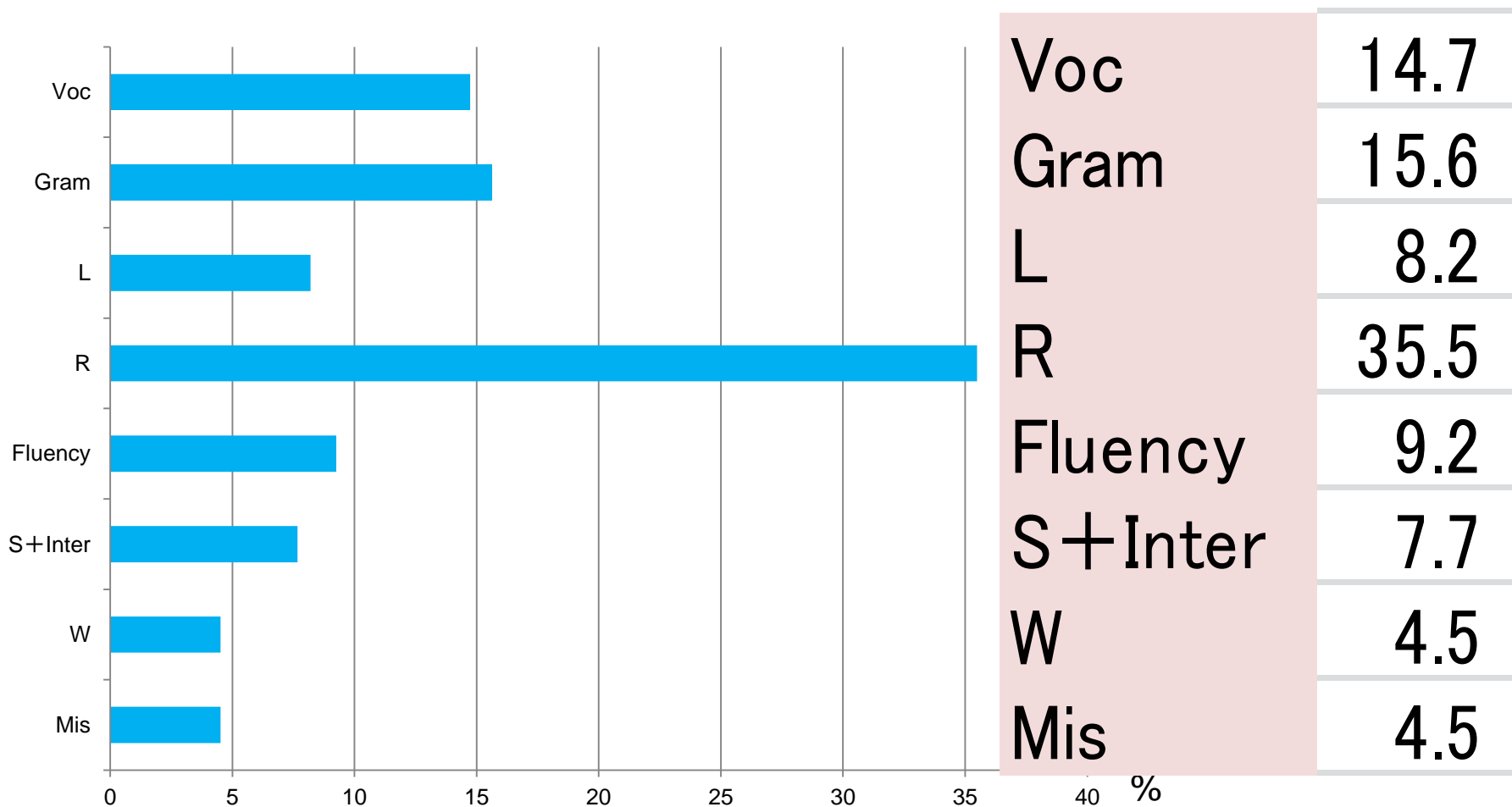
生徒の
英語力

研修担当者
の信念・力量
やる気

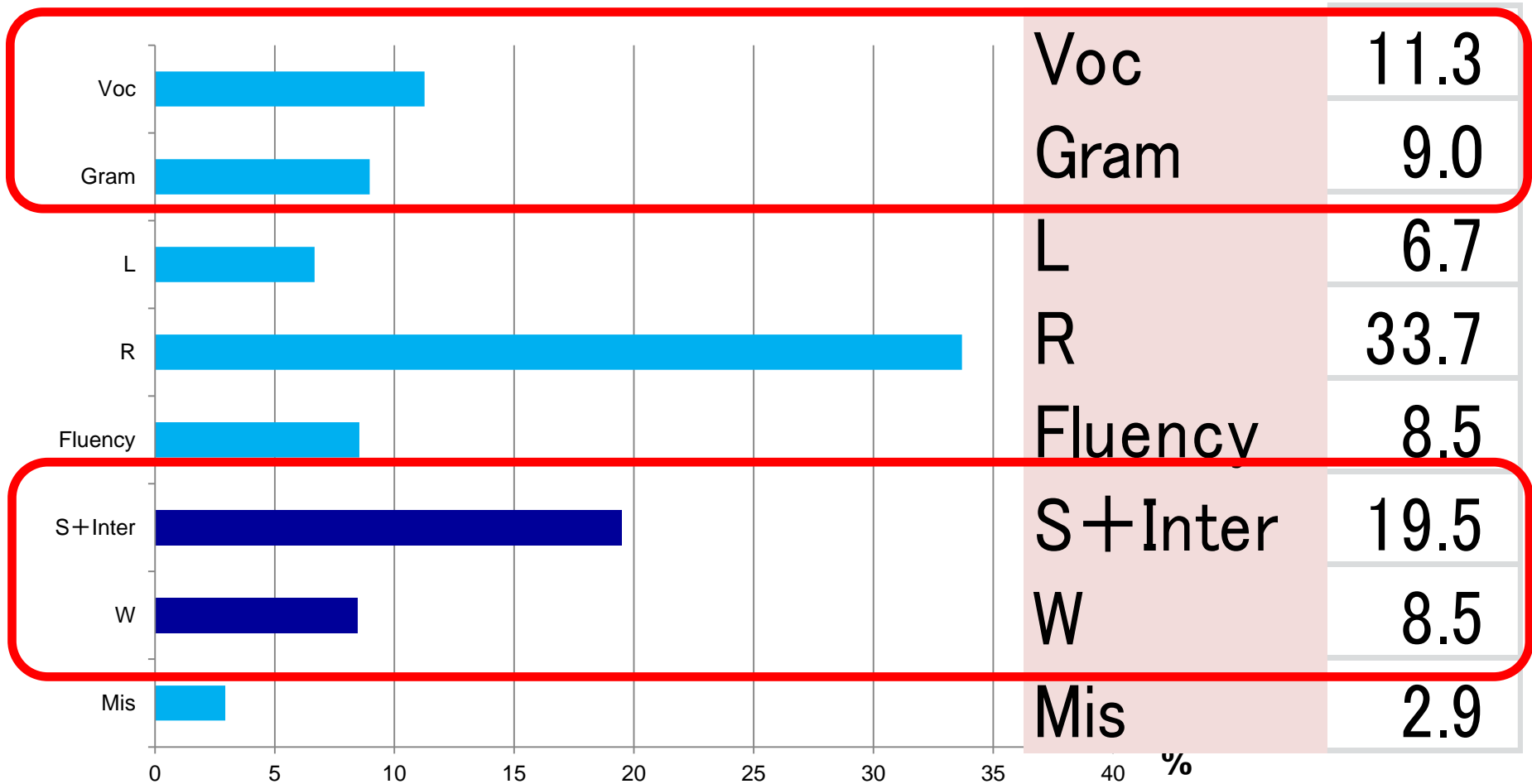
学校の特色
同僚性
教員の信念
力量・やる気
(社会文化的文脈の影響)

生徒のニーズ
保護者のニーズ

授業活動における時間配分 (授業観察: 2014年6月, 25名)



授業活動における時間配分 (授業観察: 2014年 11月, 25名)



質問紙調査による自己評価の変化 (2014, 5月～2015, 1月)

- 「教員の英語力」の自己評価(4技能)の中で特に Speaking, Writing の評価が有意に上昇
- 「コミュニケーションな授業実践」の自己評価では Oral Introduction, Speaking 活動, ライティング活動, T-S/S-S Interaction の評価が有意に上昇
- 「生徒の英語力の伸びの実感」についての評価ではSpeaking, Writing の評価が有意に上昇

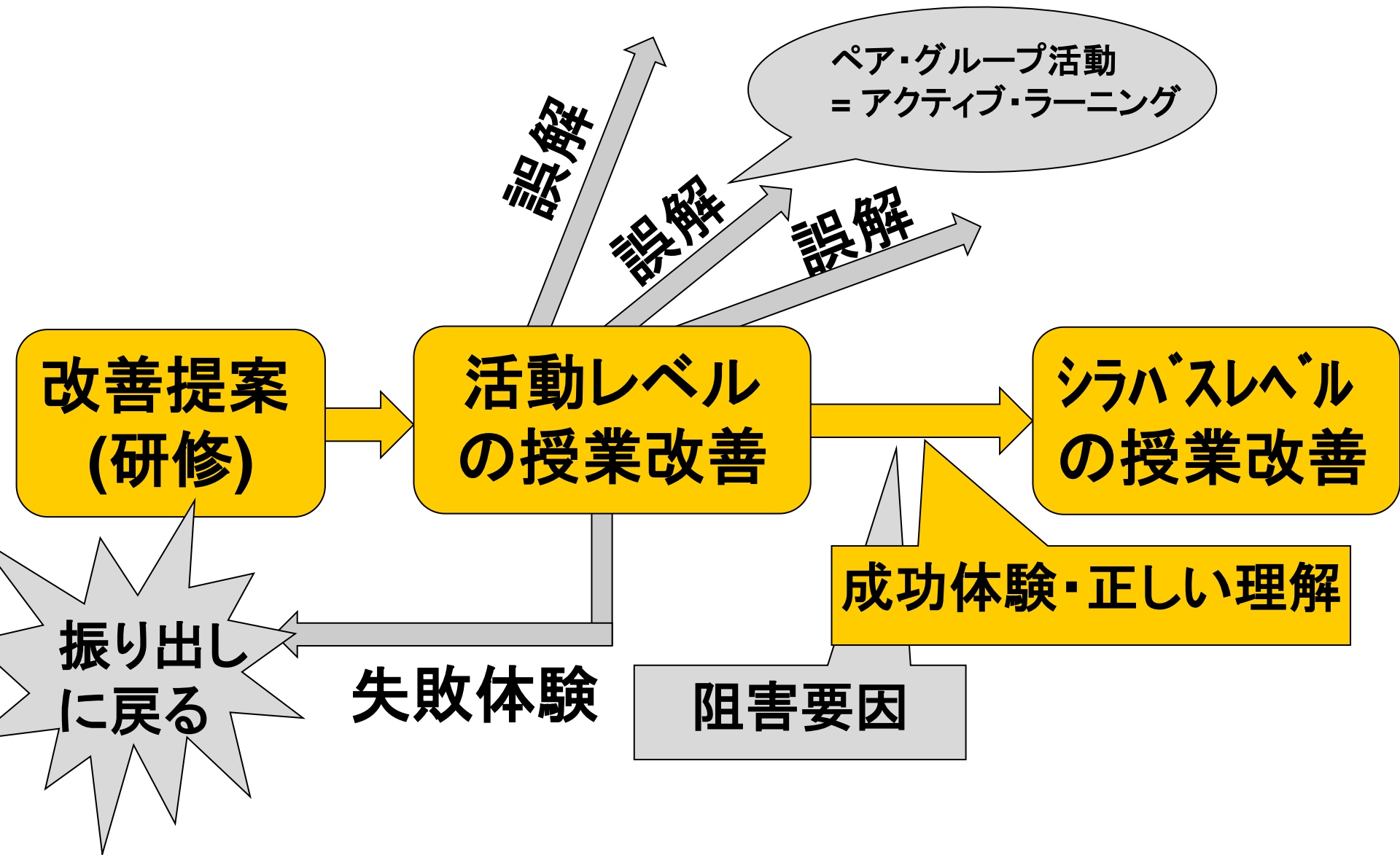
英語力(自信) ⇒ 授業実践 ⇒ 生徒の力

授業内容の質的变化 (授業観察 及び 授業改善報告書)

- R: 論理構造を図解、普段の言葉で概要説明
Pre-, While-, Post-Reading 活動
- S: 対話・発表の「枠組み」を用いた活動
発問の工夫・インタビューテスト
- W: 2行英作文、パラグラフ・ライティング
既習文法を用いた自己表現活動

前向きな姿勢＋活動レベルの授業改善

改善提案の「伝わり方」の問題



3. 今後の方向性

- シラバスレベルの授業改善 -

① CAN-DOリストの扱い

- ・ 文法、語彙はCAN-DOと関連づける。
- ・ 大きなCAN-DO⇒単元タスク⇒授業へとつなぐ。

② 教材、教員、生徒の相互作用

- ・ 生徒が教員の指導を受けて主体的に教材を活用できるようにする。

③ 評価の考え方

- ・ 評価しにくい内容 (情意面・主体的に学習に取り組む態度など)こそ適切に評価し、さらなる学習へとつなげる。

④ スーパーグローバルハイスクール事業からの示唆

① CAN-DO の扱い

改革途上の課題	今後の方向性（教員への支援）
CAN-DO の多様さ、複雑さ	大枠、基本となる点についての共通理解の促進 [必ず身につけさせることは何か?]
CAN-DO 作成、運用上の難しさ	学校・教員の創造性、独自性、振り返り、を生かせる大きな枠組みの提示
単発的で、段階的指導のあまり伴わない発信型タスク	CAN-DO – 単元タスク – 授業の有機的連携についての共通理解
CAN-DO に基づく教育成果への社会的認知	グローバル人材育成教育の意義についての保護者・生徒への周知

② 教材、教員、生徒の相互作用

改革途上の課題	今後の方向性（教員への支援）
<p>「コミュニケーション英語」 単語・文法・事実質問 (fact-finding questions) 中心 暗記・理解など低次の 思考中心</p>	<p>「英語コミュニケーション」 単語・文法は機能・文脈とセットで 高次の思考を促す質問＋ 技能統合型活動 の推進</p>
<p>「英語表現」 文法指導に偏りがち</p>	<p>「論理・表現」 既習の言語材料の活用、技能統合型の言語活動を通じた、場面・目的・話題に応じた発信力強化</p>
<p>「英語学習 = 単語・文法・英文解釈・少しの英作文と発話」 という習慣</p>	<p>「英語学習 = 口頭のやりとり、発表、的確な聞き取り・読み取り、目的に応じた作文とそれを支える音声・語彙・文法・論理(談話)・スキーマ」という考え方への転換</p>

③-1 評価の考え方

改革途上の課題	今後の方向性(教員への支援)
<p>4技能の目標が共有されない 中での定期テスト ⇒ 語彙＋ 文法＋英文解釈に収束</p> <p>× 重箱の隅をつついて減点</p>	<p>目標準拠評価に基づき、定期テ スト、日常の活動評価、パフォー マンステストによる評価のバラン スを再検討する。</p> <p>○「できること」に対して加点</p>
<p>観点別学習状況の評価の意 義についての共通理解不足</p>	<p>指導の質を高めるための根本原 則として、CAN-DOとともに整理</p>
<p>大学入試による負の波及効果</p>	<p>大学入試改革 [進行中] ⇒4技能型 <思考・判断・表現></p>
<p>「学校文化」という阻害要因</p>	<p>望ましい英語教育を実践する高 校を進学・就職面で優遇 ⇒大学教員が高校を訪問・視察</p>

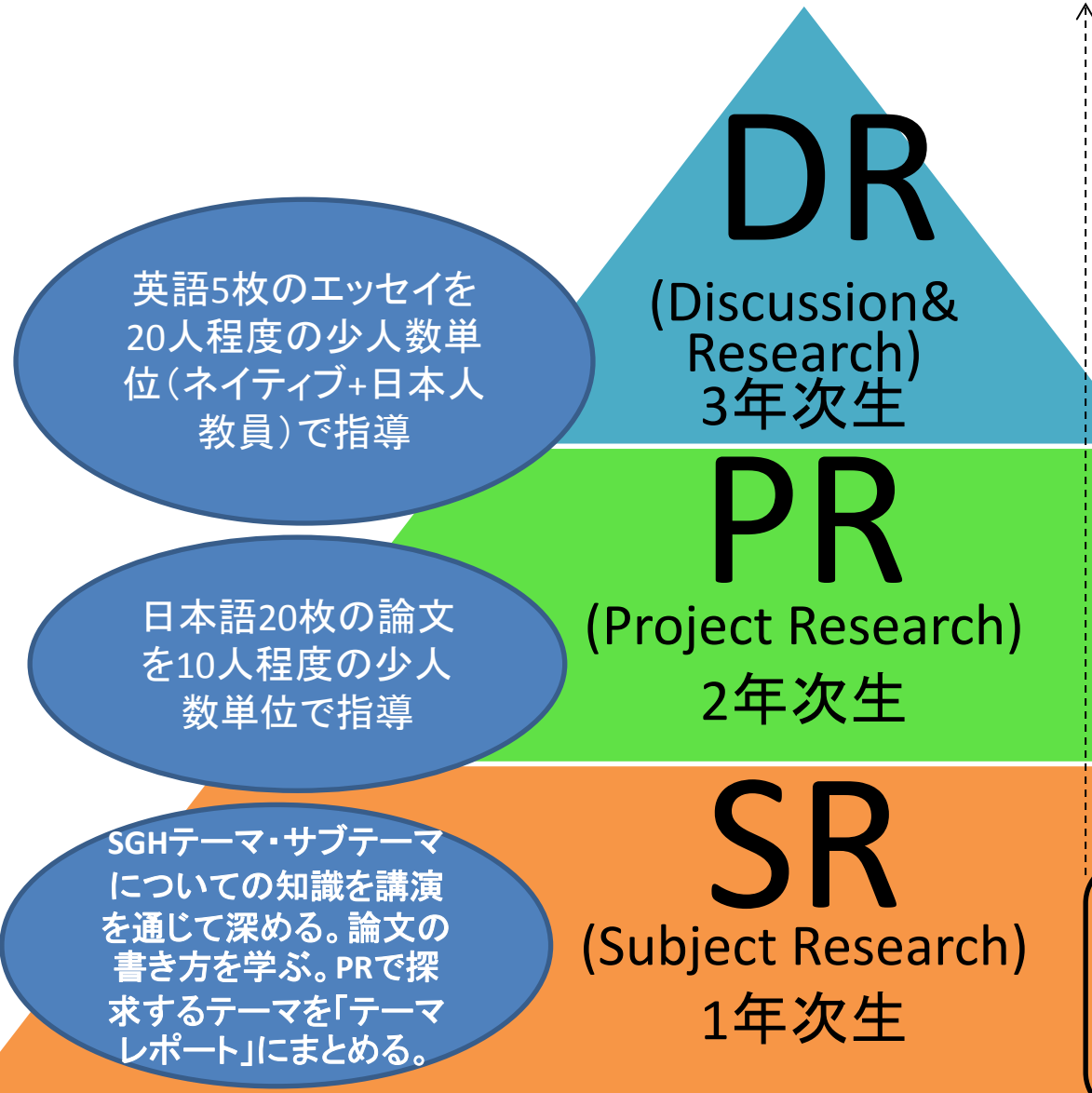
③-2 評価の考え方(要検討)

「論点整理」における 評価の観点	検討課題及び方向性(例)
「知識・技能」	<p>○外国語の4技能(聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと)について、実際のコミュニケーションにおいて活用できる知識・技能を身に付けている。</p> <p>○外国語の学習を通じて、言語の働きや役割などを理解している。</p>
「思考力・判断力・表現力 等」	<p>○目的、場面、状況等に応じて、日常的な話題から時事問題や社会問題まで幅広い話題について、情報や考えなどを外国語での的確に理解したり適切に伝え合ったりしている。</p>
「主体的に学習に取り組む態度」	<p>○他者を尊重し、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、主体的に、外国語で聞いたり読んだりしたことを活用して、自分の意見や考えなどを話したり書いたりして表現しようとしている。</p>

神奈川県立横浜国際高等学校 (H26 SGH指定校)

SGH～「外国語教育」と「総合的な学習の時間」との融合を図る～

卒業後のキャリアにつながる、英語による課題研究発表



英語5枚のエッセイを20人程度の少人数単位(ネイティブ+日本人教員)で指導

日本語20枚の論文を10人程度の少人数単位で指導

SGHテーマ・サブテーマについての知識を講演を通じて深める。論文の書き方を学ぶ。PRで探求するテーマを「テーマレポート」にまとめる。

- ・海外留学
- ・課題研究を生かした進路選択(AOなど)
- ・生涯の自己テーマ(起業など)

さまざまな海外体験

- ・海外修学旅行(マレーシア)
- ・SGH海外スタディツアー(バンングラデシュ・カンボジア)
- ・マレーシア<ボルネオ>
- ・海外姉妹校訪問(8カ国)

英語による思考力・判断力・表現力の育成

- ディスカッション
- ディベート
- エッセイライティング
- プレゼンテーション
- (ネイティブ+日本人教員で指導)

- 第2外国語(仏・西・独・韓・中・ア)
- による異文化理解
- (ネイティブ+日本人教員で指導)

総合的な学習の時間

スーパーグローバルハイスクールにおいて 求めていく必要があるもの ～英語の視点から～

- ①**当該専門領域において英語で授業を行う教員の確保**
日本人教員＋ネイティブ・スピーカー（専門スタッフ）
- ②**日常的に英語を使う環境整備**
留学生の受入れ＋生徒の海外留学
- ③**Task-Based Instruction（TBI）**
課題・問題を解決する時に起こる言語使用によって言語発達を促進
- ④**Content-Based Instruction（CBI）**
**SGHの中心的な科目の学習をL2（英語）で行うことにより
当該科目の知識を得ることと同時にL2（英語）を獲得**
- ⑤**リーディングの強化**
**先行実施している大学からは“専門が読めない”との声
Speaking, Writing, Listening + READING**

まとめ:つなぐ力

- 毎日の授業と生徒の卒業後の進路・将来とがつながるように、CAN-DO を作成する。
- 教員と生徒、生徒同士が円滑につながることができるように、教科書等の教材、タスクを開発・活用する。
- 特に「学びに向かう力」(情意・態度面) を、小学校 ⇒ 中学校 ⇒ 高等学校 へと一貫してつなげられるよう、この部分の指導・学び・評価の中味を明確化する。
- 評価の観点を整理し、組織的な授業指導・学習評価の改善、個に応じた指導の充実につなげる。